

白石城下

おはなし処マップ



白石城下おはなし処マップ

い 一文天狗方旗(夙)ものがたり

むかし、炭焼き茂兵衛が、一日の疲れをいやいに、鎌先の岩風呂入ったんだと。すると山の上から、大きな天狗が現れたんだと。おどろいて、声をあげた茂兵衛に、天狗達の相撲大会があると聞いたんだと。茂兵衛は、村人達にこの話をしたが、たれも信んじねがたんだと。どうやら、夜になって、山の上から「ハッケヨイ!」といふ、天狗達の声が聞こえてきたんだと。翌朝、山の上を見上げると、松の木に力紙^{すこし}が、ひっかかっていたんだと。この力紙をお守りにする願いが叶ったんだと。それで、この力紙を、天狗の絵入りにして、子供達が丈夫に育つようにと祈ってあげたんだと。(*力紙とは、力士が取り組みの前に、力水をつけた後に口元をぬぐう紙のこと。)

3 金兼倉山の伝説

むかし、小原・金兼倉山の沼には、大百足が住んでいたんだと。この大百足は、屋敷よりも大きな姿で、小原村や白石村に飛んできては、田畠を荒らし、悪りごどばりしたんだと。ついに、白石城主・片倉様にも、大百足の悪業が伝わり、愛宕大権現に祈願したんだと。お告げがあり、よもぎでこしかれた弓矢で、大百足を退治できたんだと。おかげで、平和になり、田畠も夷り豊かになったんだと。

は 萬蔵稻荷の伝説

むかし、小坂山^{さか}に萬蔵^{よしま}といふ男がいたんだと。ある日の帰り道に、小坂山^{さか}で年老いた旅人と出会ったんだと。旅人は必ずひやせこけていて、もぞくくなつた(かわいそうになつた)萬蔵は、心づしの夕飯を出して、一晩泊めたんだと。翌朝、萬蔵が自覚めると、どこに行つたか、いねからたんだと。仕事がある萬蔵は、旅人用に朝食を用意^{なげ}して、出掛けたんだと。小坂峠を越えようとした時、突然、稻荷明神が現れ(実は夕べの旅人は稻荷明神の化身だ)、萬蔵のもてないに感動したがと、駿馬3頭を授けたんだと。稻荷明神のいう通り、駿馬を大金に替えた萬蔵は、稻荷明神への信仰のために、峠にあ堂^あを建てて、小坂峠を往来する旅人を助けながら暮らしたと。

稻荷明神は、豊作や商売繁盛のきつねの神様。お参りの時に、150以上ある朱色鳥居を数えてみて下さい。行き帰りなどで、數か「ちがう?から...それは、きつねの神様から。(「かにされているのかも?)

に 上杉のきつね

むかし、白石城が片倉家の領地になった時の話。城に住みついでいた狐が、悪りごどばりして、家臣達を困らせていたんだと。その狐は、上杉領の負の白石城の守り神だったんだと。それで、片倉様がお宮を建てて、充分に祀ったんだと。それからは、城内は平和になったんだと。今でも、福岡に狐壇という地名が残っている。

ほ おかる石の伝説

むかし、福岡の菅生田の百姓が、伊勢様とお詫^{すま}様の両方を参詣した帰り道。わらじの間^{あい}、小石^{こいし}がはさまったんだと。捨てても、捨ても、はがれねもん^{はがれね}もん^{もん}が^{らしゃなく}って、手^てに持つて帰ったんだと。それから、ふしきなど^どに、小石^{こいし}はだんだんと大きくなつたんだと。それと共に、百姓の家も、七つの倉^{くら}が建つくらいに栄えたので、皆が菅生田長者と呼ばれるようになったんだと。(白石の言葉で大きく育つことを「あかる」というから、「あかる石」と呼ばれて、今でも示^{あらわ}されている場所には、夏になると、ホタルが飛び交う。)

へ 孫太郎虫のおはなし

むかし、丹波国に橋立倉之進^{はしだてくらわいしん}といふ侍^{しらわ}がいたんだと。妻と美しい娘^{むすめ}「桜戸^{さくらど}」があり、娘をとって幸せに暮りしていたんだと。ところが、美しい桜戸に思^{おも}いをよせていた侍^{しらわ}・大柳一角^{おほやなぎ}が、(自分を差し置いて)娘をとったことを逆恨みして、なんと倉之進を暗殺^{あんさつ}してしまったんだと!

侍同士の決まり事で、倉之進の遺族^{いしゆ}は、仇討ちの宿命^{しゆめい}を負わされ、仇^お・大柳^{おほや}を追^おい^お言^い者^し國^{くに}をめぐる旅に出たんだと。しかし、旅の途中で木戸戸の母^おも、娘^{むすめ}も先出^{さしゆつ}てしまい、残されたのは桜戸と夫の志^し形見^{かたちみ}である一人息子^子「孫太郎^{そぶたろう}」だけ。その後、奥州^{おくしゆ}へ逃げる際に、弟^{いとこ}忠信^{ただのぶ}が義經^{ぎけい}をかばい、また、奥州へ逃げる際に、弟^{いとこ}忠信^{ただのぶ}が義經^{ぎけい}の身代^{みだい}となり、死んでしまったんだと。飯坂にて、兄弟の帰りを待つた母親^{おやじ}は、うんと嘆き悲しんで、日に日にやせていったんだと。そこで、兄弟の妻達^{めうだつ}が、自らの悲しみを抑えて、七キ夫の甲冑^{こうしゆ}を身にまとい、凱旋報告^{凱旋報告}をして見せ、母親^{おやじ}を元氣^{げんき}づけたんだと。その後、家族は仲良く暮らしたそうな。

後に松尾芭蕉、天野桃^{とう}隣^隣も一句詠んでいる。
斎川・田村神社の境内に、六角形のあ堂^あがあり
弓と長刀を持った婦人の甲冑武者^{こう}2体^にが安置^{おもて}
されている。現在の甲冑堂は、昭和14年に再建^{さいけん}。

この他にも、たくさんのお話があまから、みんなも探してみてね!

と 四屋敷の伝説(白石にもあった!?)

むかし、白石にお菊^{おぎく}という美しい娘がいたんだと。そのころ、伊藤家に仕官して白石に住んでいた松前安宏^{まつまへ やすひろ}は、片倉小十郎重長の姫君と結婚^{けつこん}したが、美しいお菊^{おぎく}とともに寵愛^{じゅうあい}されたんだと。そんなある時、松前家秋必藏^{あきひざむ}の四枚^{よまい}のうち、一枚^{まい}がなくなり、当番のお菊^{おぎく}が濡れ衣^{ぬれぎぬ}をさせられたんだと。安宏からも責められ、思^{おも}いあつたお菊^{おぎく}は、屋敷^{やしき}の井戸^{いど}に身投げ^{おと}ってしまったんだと。よほど怨んでいたんだ^{はなへ}、毎夜、その井戸戸からはずり泣く声^{こゑ}が聞こえるようになったんだと。それ以来、松前家の屋敷を「四屋敷」と呼ぶようになったんだと。わりかっただと思^{おも}った安宏は、伊門に入り、お菊^{おぎく}の供養^{くよう}をしたんだと。安宏の子もまた、供養^{くよう}引き継いで、松前家は安泰^{あんたい}になったそうな。

(ちなみに、この安宏の子とは、後に「伊藤騒動」と言われる仙台藩の危機を救った人物、三代目・片倉小十郎景長^{あんちゃん きよひろ}。)

5 安珍・清姫 恋物の話

むかし、白石出身の僧・安珍^{あんぢん}が熊野三山へ修業を行ったんだと。途中、清姫と出会い、恋に落ちたんだが、修業中だから…と、結婚をあきらめたんだと。ところが、清姫は安珍のことを忘れられず、川に身を投げて、大蛇^{おと}に化身し、追いかけてきたんだと。安珍は、お寺の大金童^{おと}に隠れたが、大蛇^{おと}になった清姫は、口から炎を吐いて、自分もとも燃然^{もよもよ}やってしまったんだと。(安珍の供養のために、白石の人々は、地蔵尊を延命寺に建てた。いつのころからか、「こりり地蔵」と呼ばれるようになった。)

り 甲冑堂の話

むかし、飯坂の大鳥城・佐藤家には、継信^{つぐのぶ}・忠信^{ただのぶ}といふ兄弟^{いとこ}がいたんだと。兄弟は「義経^{ぎけい}旗^き旗下の四天王^{よんてんのう}」として、その名を挙げたんだと。四国屋島の戦^{たたかひ}にて、兄^お継信^{つぐのぶ}が義経^{ぎけい}をかばい、また、奥州^{おくしゆ}へ逃げる際に、弟^{いとこ}忠信^{ただのぶ}が義経^{ぎけい}の身代^{みだい}となり、死んでしまったんだと。娘^{むすめ}2人は、なんとか逃げて命拾いしたんだ^{げん}とも、病弱な母^{おやじ}ちゃんは、力^{ちから}して死んでしまったんだと。それが、団七への仇討ちを決心した姉妹^{いとこ}は、江戸一番の兵法家・由井正雪^{ゆい まさゆき}の門下^{もんか}に入り、姉^お・宮城野子^{みやぎのこ}は金鏡^{きんきょう}、妹^{いとこ}・信夫^{しんぶ}は長刀^{ながと}を修得^{しゅとく}したんだと。武芸^{ぶげい}だけでなく、一般常識^{じょうしき}も学び、姉妹^{いとこ}は見違えるほど立派^{だいぱい}になつたんだと。そのころ百姓^{ひやく}が武士^士に仇討ち^{しゆとうち}することは禁じられていたんだ^{げん}と、「孝女の誉^{ほめ}」と幕府から特別に許可^{きょく}されたんだと。いろんな人のおかげで、姉妹^{いとこ}は、団七に仇討ち^{しゆとうち}することができるんだと。その後、姉妹^{いとこ}は、仏様^{ぶつじやう}に仕え、亡き両親と仇^お・団七を弔^{たむ}い、静かに暮らしたそうな。

今でも、無礼打^{むれぢ}の場^ばである「八枚田^は」は、残されており、地域^{ちいき}の人々が米^{こめ}を育てている。その近くには、与太郎と2人の娘^{むすめ}を祀る孝子堂^{こうじどう}がある。また、この吉良は、「蕃太平記白石斬」のモデルになつた。団七踊りとしても、各地で受け継がれている。

このお話は、「しおりし郷土の夜話」を参考にし、「白石なまり」でまとめてみましたよ

と 小菅地蔵尊と西念和尚

むかし、大磨沢・小菅村の甚兵衛^{じんべゑ}が、お殿様へ年貢^{ねんくわん}を納めるために、江戸に旅することになったんだと。村中の年貢50両を持っていた甚兵衛は、大事に大事に抱えて行ったんだと。無事に浅草まで着いたところで、巾着^{きんちよ}を盗まれてしまったんだと。とっても弁償^{べんじょう}で^きねし、年貢が未納^{みのな}になることで、村入にも迷惑^{めいわ}掛かるしと、甚兵衛は死んで「お詫びす^あべど、木橋^{きはし}の上に立つたと。そこへ声をかけたのが「怪盗木鼠^{けいとうぼ}」小僧^{きよ}の吉五郎^{よしこうろう}で、「俺が御用^{ごよう}になり、処刑^{しゆけい}されたら、縄番^{じょうばん}1本あげてくれ。」と言って、50両をサッと手渡したんだと。おかげで、甚兵衛は、年貢を納めることが^こぎだんだと。木に戻つた甚兵衛は、早速、お寺の^ご住職^{じゆし}を訪ね、観音経の一番ありが^{たい}ところを教わり、命の恩入・吉五郎のために毎日無事をお祈りしたんだと。甚兵衛がお祈り^{おき}る時に、観音経の一部だけを何回も繰り返すので、たちまち木村で流行り唄^{うた}になり、村中で観音経の唄^{うた}が歌われたんだと。まもなく、江戸では怪盗木鼠^{けいとうぼ}小僧^{きよ}の吉五郎^{よしこうろう}が御用^{ごよう}になつたが、ふしきなことに、処刑^{しゆけい}を免れたんだと。吉五郎は、心を入れ替えて、仏様に仕える身となり、「西念^{せいねん}」と名を改めて、音者^{おとしや}国行脚^{こくぎやく}を続けたんだと。みちく小菅村を訪ねた西念は、甚兵衛と再会し、これは仏様のおみちび^{おみちび}からと、木村で余生を過ごしたとさ。(小菅地蔵尊は、西念を供養^{くよう}するため、建立したと云ひゆる。この時に、念佛^{みのぶ}が子守唄^{こどもりうた}になったのが、「唄入り観音経^{うたはりかんのんき}」だったそうだ。) サアサ出しました、ヨーヤナ、彼親観音力^{きのり}、キタコラエー、般若発^{はんにゃはつ}ねぬねせい。

る 白石女商文言^{ごんご} (仇討ち話)

むかし、大磨沢に与太郎^{よしとうら}といふ百姓^{ひやく}がいたんだと。幼い娘^{むすめ}2人と田んぼ^{たんぼ}の草取りをしていたら、片倉家剣術指南の志賀^{しが}団七^{だんしち}が通りかかり、その袴^{はかま}の裾^{すそ}に泥^{なづ}をかけてしまつたんだと。団七は、いきなり^{いきな}こっしゃいて、与太郎を無礼打^{むれぢ}してしまつたんだと。娘^{むすめ}2人は、なんとか逃げて命拾いしたんだ^{げん}とも、病弱な母^{おやじ}ちゃんは、力^{ちから}して死んでしまつたんだと。それが、団七への仇討ちを決心した姉妹^{いとこ}は、江戸一番の兵法家・由井正雪^{ゆい まさゆき}の門下^{もんか}に入り、姉^お・宮城野子^{みやぎのこ}は金鏡^{きんきょう}、妹^{いとこ}・信夫^{しんぶ}は長刀^{ながと}を修得^{しゅとく}したんだと。武芸^{ぶげい}だけでなく、一般常識^{じょうしき}も学び、姉妹^{いとこ}は見違えるほど立派^{だいぱい}になつたんだと。そのころ百姓^{ひやく}が武士^士に仇討ち^{しゆとうち}することは禁じられていたんだ^{げん}と、「孝女の誉^{ほめ}」と幕府から特別に許可^{きょく}されたんだと。いろんな人のおかげで、姉妹^{いとこ}は、団七に仇討ち^{しゆとうち}することができるんだと。その後、姉妹^{いとこ}は、仏様^{ぶつじやう}に仕え、亡き両親と仇^お・団七を弔^{たむ}い、静かに暮らしたそうな。今でも、無礼打^{むれぢ}の場^ばである「八枚田^は」は、残されており、地域^{ちいき}の人々が米^{こめ}を育てている。その近くには、与太郎と2人の娘^{むすめ}を祀る孝子堂^{こうじどう}がある。また、この吉良は、「蕃太平記白石斬」のモデルになつた。団七踊りとしても、各地で受け継がれている。